

## 被災者の生活と心の復興過程に関する考察

—兵庫県南部地震を対象とした影響要因の分析—

学部 準会員 中村 文香 (日本女子大学)

### § 1 はじめに

大きな地震などの発災により、被災者の生活と心は非日常の状態に陥る。その後、被災者はそれぞれ様々な過程を辿り、徐々に復興していくが、その過程では多様な事象が被災者の生活と心に影響を及ぼすものと考えられる。それらが及ぼす影響は、被害の程度や被災者の個性によって異なることが予測できるが、時間の経過も被災者の生活と心に影響を及ぼす一要素であると捉えられる。

本論文では、兵庫県南部地震の発生から10年の経過に着目し、周辺社会との関わりの中で、被災者の生活と心に影響を及ぼす要因を抽出する。その分析を基に、復興を手助けする要因を見出すことを目的とする。

### § 2 被災者の生活と心に影響を及ぼす要因

震災後、10年間の被災者が自身の言葉で体験や心境を語る手記<sup>1-10)</sup>から、全354事例を抽出した。それらの事例より、被災者の生活と心に影響を及ぼした要因を抽出し、阪神・淡路大震災復興誌<sup>11)</sup>等より調査した周辺社会の出来事と対応させた。

表1は被災者の生活と心に影響を及ぼした要因を

抽出した、事例の抜粋である。地震直後と復興過程に発生する要因は影響の仕方が異なると予測できる。また、被災者の復興には生活と心の二つの側面があると考えられるため、要因と影響を二つに分け、それぞれを分類して抽出する。

事例115では、48歳の女性の自宅は全壊し、経済的な不安を抱える。自宅の再建問題が進展しない一方、周囲の話題は家族のことや旅行のことなどが中心になり、震災について触れることが少なくなる。顕著に現れる生活の復興状況の違いは、生活の復興が遅れる被災者に自分は取り残されていると感じさせる。

この事例では、生活復興の進展状況の違いが、心に影響を及ぼしている。

事例218、219では、39歳の男性自身の生活は復興したが、街の目に見える部分の復興と共に被災地では震災の記憶が少しずつ薄れていると感じており、震災直後に被災地に存在した人の温かさや、連帯感の記憶に捉われ、自分の心は復興から取り残されていると感じている。被災者の生活や、街の目に見える部分が復興していくことが心に影響を及ぼしている。

表1 被災者の手記に基づいた事例の抜粋

事例番号	時期	要因			属性	影響		出典	共通要因	
		地震による被害	地震後に起こった出来事			心に関する影響	生活に関する影響			
115	1996年8月	自宅は全壊	自宅マンションの再建問題はなかなか進まない	友人が集まって話をあっても話題は家族のことや海外旅行のことが中心	一部損壊や百万単位程度の金額の修繕費で済んだ人からみんな被災者で前向きにがんばっていると言われる	48歳女性 娘と二人暮らしで、娘は高校生でこれから大学に行かせなければならぬ	今の自分のつらさの何がわかってそんなことが言えるのかと腹立たしく悲しくなる。	震災直後のほうがわけもわからずかえって明るくいられた。	文献3「再建」	人に関すること
218	2000年	(特に大きな物的、人的被害はなかった)	友人知人親戚に恵まれ、衣食住も事足りている	趣味やスポーツも幅広くこなすようになる	「带状疱疹」と診断された	39歳男性 会社員	昨年(一九九九年)僕は、「心の復興は、しない」と、手記に書いた。つい最近、それが体の異常に及んだ。病の苦しみを知らず、まだまだ安全圏にいる自分が「心の復興」の本当の意味を取り違えていた気がして、恥ずかしくなった。	「带状疱疹」は、震災後しばらく、震災ストレスによる病としてマスコミなどで取り上げられたことがあったと思う。我々の住む被災地には、この病で苦しんだ人が大勢いるはずだ。発症して分かったが、安静にしなければならぬこと、治療費が風邪などに比べかなり高額なことの二点が、忙しい身にさらに大きなストレスとなつてのしかかってくる。生活がどうにも立ち行かなくなり心に大きな傷を持ったがために発症してしまった人にとって、追い討ちをかけられるような病だ。病気になるまで「心の復興」にまだまだ遠い人のことがほんの少し分かった。	文献6「三線」	昇華
219					2年ほど前から沖縄の三味線「三線」を始める		「三線」も、大きな癒しとなった。音楽を通じ人と出会うたびに、自分がどんどん前向きになっていくのが分かった。音楽は聴くだけでなく、楽器を弾くなど自分が主体的に関わっていくことでさらに心を癒す効果があるようだ。	最初は自分で適当に弾いていたが、類は友を呼ぶのか、楽器の世界とはこういうものなのか、不思議と同好の人と多く出会うようになり、今では老若男女いろいろな仲間に入れていただけるようになった。		昇華

この事例では生活の回復と同時に心が回復しておらず、心に抱える不安が病気という形で表面化する。一方、震災後始めた趣味が心を整理するきっかけとなっており、震災の記憶と向き合うきっかけや方法を持つことで、心の復興に繋がる場合もあることがわかる。

全事例についてこのように分析した結果、被災者の手記に共通している要因を表2のように抽出した。

表2 共通する要因と主な内容

共通する要因	主な内容
建物の解体	建物の解体に関する事
都市計画	都市計画についての時期や情報伝達に関する事 都市計画の遅れに関する事
仮設住宅	仮設住宅への入居に関する事 仮設住宅に入居できないことに関する事 仮設住宅でのイベントに関する事 支援の手がないことに関する事
行政の対応	行政の対応に関する事 都市計画の遅れに関する事
被災地を離れた	県外避難者への対応に関する事 地域社会と一緒に復興していない場合の心の復興に関する事 震災のことを聞かれることに関する事
人に関する事	人に関する事 他人を頼る度合いに関する事
人的被害	近い人の死に関する事 向き合う方法(昇華していく方法)に関する事
経済的な問題	生活基盤に影響を受けた人に関する事
物的被害の程度	早期に生活が回復した人に関する事
時間の経過	時間の経過に関する事
建物の再建	家の再建に関する事
義援金	義捐金の金額に関する事
ボランティア	ボランティアをすることに関する事
イベント	震災関連のイベントに関する事
昇華	手記を書くことに関する事

例えば都市計画に関連した要因としては、都市計画や経済的な問題、建物の再建の進展状況等が影響する。また、仮設住宅に関連した要因としては、仮設住宅の供給や入居条件、抽選方法、仮設住宅入居後の生活、仮設住宅に入居できなかった場合の生活等が影響する。生活の安定に住宅の果たす役割が大きいことや、生活の安定が心にも大きく影響を及ぼすことがわかる。

### §3 時期による要因の変化

時系列に注目すると、事例の内容は時期により特徴

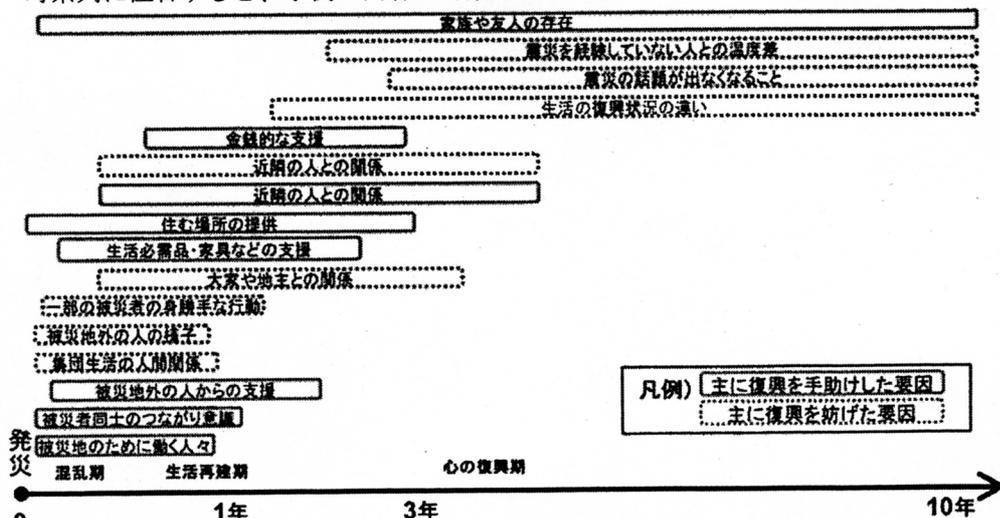


図1 人に関することに分類される要因と時期

が見られる。中でも特徴の見られた人に関することに分類される要因と、それらが現れる時期を例として図1に示す。

地震発生後初期の事例には、自分や家族を救出してくれた人への感謝、被災地のために働く人々、地域住民同士の助け合い等、人の温かさに感謝するものが多い。例えば35歳の男性の住むマンションでは、地震後コミュニケーションが活発になり、地域コミュニティの重要性に気づく(事例3)。また、50歳の女性は被災地で救援活動を行う人々を実際に見たときの安心感、危険な中で働く人への信頼感がその後も印象に残る(事例13)。被災者同士につながり意識が芽生えていることや、被災地外からの支援が被災地は孤立していないと感じさせる場合もあることがわかる。一方、救援物資を独り占めしようとする人がいて嫌な気分になった(事例89)、高齢のため水の出ない避難所のトイレの掃除を免除されるが、かえってその気配りが気兼ねとなりトイレに行きにくくなった(事例42)という場合もある。一部の被災者の身勝手な行動や、集団生活での人間関係も被災者の生活や心に影響を及ぼす要因になることがわかる。

仮設住宅への入居が始まる頃になると生活の再建に関する内容を語る事例が多くなる。例えば33歳の女性夫婦は友人や近所の人に手伝ってもらい公団住宅へ入居する。安定した住まいを手に入れた喜びを語る中で色々な人に支えられていることを実感し、感謝する(事例69)。一方、借家の再建により家賃が震災以前より値上がりし、住み慣れた場所へ戻ることができず、大家に対し、「もう少し借主のことを考えてほしい」という人もいる(事例110)。大家や地主との関係も影響を及ぼす要因になる場合もある。また、街の復興が目に見えるようになると、被災地外の人

「随分きれいになった」という言葉に違和感を覚え、街の復興が真の復興ではないと感じる場合や(事例121)、事例115のように、生活の復興状況の違いや、被災地でも震災の話題に触れることが少なくなっていくことが割り切れない感情につながっていると考えられる場合もある。

同様に各要因についても分析した結果、時間の



ことがわかる。

被災者の生活復興に行政の政策は大きな影響力を持つが、時期の情報がない場合、次の生活への移行に目処が立てられず、被災者は不満を抱えやすい。情報開示の時期や方法が重要である。

また、生活の復興状況は人により様々であるため、被災者は個別対応を求めるが、行政の対応には平等性が第一に求められる。その結果、被災者の要求との間に溝が生じる場合が多く、被災者は行政の対応への不満や、復興から取り残されるという不安を抱えやすい。

交通事故などの人為的原因による災害と違い、地震災害には人を失った悲しみや怒りをぶつける対象が存在しない。また同時に、物的被害や生活被害も発生する。人的被害という失ったものを取り戻せない場合、心に受ける影響は大きく、生活よりも心に目が向く場合が多い。孤独だと感じる場合が多く、その孤独は人との関わりによって癒される場合や、趣味や仕事に打ち込むことで癒される場合、同じような体験をした人と交流し、自分が抱えている孤独に対して共感を得られることで癒される場合などがある。人により方法は様々であるが、悲しみを外に出したり、自分の心を整理する方法を得られた場合に、身近な人の死を受け入れていけるようになることが多い。

一方、経済的に大きな被害を受けた場合、生活の復興は非常に難しく、まず生活に目が向く場合が多い。例えば、義援金や親しい人からの金銭的な支援のように、生活の再建につながるものは生活や心の復興を手助けする要因になりやすい。しかし、経済的な被害が生活に及ぼす影響は大きく、10年経った現在も生活が復興していない人もいる。特に自営業で、生活基盤である商売と住宅の両方に被害を受けている事例には、生活の復興が難しいと感じている場合が多い。地域全体が被災しているために、周辺社会の街や人々の様子の変化し、震災以前のように商売ができなくなる場合もある。経済的な不安が心に及ぼす影響は大きく、その結果、生活が復興して初めて心の状態に目を向ける人が多いという特徴がある。

生活が復興してきたことにより、心の状態に目を向ける人が多くなる心の復興期は、震災を経験してきたことによる不安を何らかの形で乗り越えたいと要求する時期である。混乱期に存在した周辺社会のつながり意識が薄れることに抵抗を感じる事例や、震災の記憶が年々薄れていると感じる事例からは、震災という心に大きな衝撃を与えた記憶を他の記憶と一緒に扱ってよいのかという不安を抱えていることがわかる。この

不安と向き合い、昇華するという段階を踏んで日常に戻ることができると考えられる。日々の生活の中で自然と昇華に繋がる場合もある。しかし、手記を書くこと、ボランティア活動に参加することなど人によって方法は様々であるが、被災者自身が震災という経験と向き合うことにより、昇華に繋がっている場合が多い。整理すること、立ち止まって考えることは被災者にとって重要なことであり、震災を経験した自分自身と向き合う方法を得られることは、昇華に向けた重要な要素となる。

## § 5 おわりに

兵庫県南部地震からの10年間の復興過程は3つの時期に分けて考えられる。地震被害の程度はどの時期においても生活と心に対する影響が大きい、時期によって被災者の生活と心に影響を及ぼす要因は異なる。生活の復興には住まいや生活基盤、周辺社会の出来事が大きく影響する。心の復興には生活の復興や周辺社会の街や人々の復興が大きく影響するが、心の復興が生活の復興と同時に進むわけではない。これを周辺社会が理解し、個々の状況に配慮する余地を持つことは、被災者の復興を手助けする重要な要素と考えられる。

### 引用文献

- 1) 阪神大震災を記録し続ける会：被災した私たちの記録，朝日ソノラマ刊，1995年5月30日。
- 2) 阪神大震災を記録し続ける会：阪神大震災 - もう1年、まだ1年，神戸新聞総合出版センター，1996年4月1日。
- 3) 阪神大震災を記録し続ける会：まだ遠い春、阪神大震災3年目の報告，神戸新聞総合出版センター，1997年6月15日。
- 4) 阪神大震災を記録し続ける会：今、まだ、やっとならぬ阪神大震災それぞれの4年目，神戸新聞総合出版センター，1998年6月15日。
- 5) 阪神大震災を記録し続ける会：阪神大震災 私たちが語る5年目，神戸新聞総合出版センター，1999年7月30日。
- 6) 阪神大震災を記録し続ける会：阪神大震災 2000日の記録，神戸新聞総合出版センター，2000年8月10日。
- 7) 阪神大震災を記録し続ける会：阪神大震災 7年目の真実，JSP (PTE) LTD，2001年6月30日。
- 8) 阪神大震災を記録し続ける会：阪神大震災 8年目記憶の風化と浄化，JSP (PTE) LTD，2002年9月30日。
- 9) 阪神大震災を記録し続ける会：阪神大震災 記録と記憶，JSP (PTE) LTD，2003年9月30日。
- 10) 阪神大震災を記録し続ける会：阪神大震災から10年 未来の被災者へのメッセージ，神戸新聞総合出版センター，2005年1月17日。
- 11) 兵庫県・(財)21世紀ひょうご創造協会：阪神・淡路大震災復興誌，第1巻，1997年3月31日。